

水彩 Technique。



メディウム！

水彩でも油絵のような技法を駆使したいというアーティストが多い。ホルベインは新たに11種類の高品質な水彩用メディウムを発表します。絵具の透明度を高めたり、にじみを抑えたり、画面にきらめきを与えたり、紙のはじきを抑えたり、白抜きをしたり、部分をマスキングをしたり、どちらかといえば保守的なイメージの水彩が変わっていくはずです。

<ホルベイン水彩用メディウム シリーズ> オックスゴール/サイジング リキッド/ウォーターカラーメディウム/アラビアゴム メディウム/アラビアゴム ベースト/イリデッセント メディウム/マスキングインク/マスキング インク クリーナー/水彩画 保護ワニス/UVグロス パーニッシュ/UVマット パーニッシュ

ホルベイン工業株式会社 東京都豊島区東池袋2-18-4 TEL.03(3983)9251 大阪府東大阪市土小阪1-3-20 TEL.06(6723)1554



holbein

www.holbein-works.co.jp

holbein

館勝生

ミツバチの羽音のそばで
鷹見明彦 文 森田兼次 写真・印

1985年、神戸にて。大阪芸大の在学中から個展を開いたりグループ展に参加していた。バブルな時代とともに、ニュー・ペインティングの影響などを受けながら、盛り上がっていた「関西ニューウェーブ」の渦中にいた。



1987

「ストロークや筆致で画面をつくるのが主になるにつれて、花のような形態ができました」

ten dialogists 1987
綿布に油彩 160×160cm

新大阪から車で西へしばらく行った豊中の阪神高速インター付近。鉄工所が建ち並ぶ路地を入ったスレート壁の工場の上階にアトリエがあった。部屋の壁や床に堆積した白筆跡や染み、ワゴン上に堆積した白と黒の絵具の厚みが、ここぞくり返されてきた行為の時間を物語る。大阪市内に住んで、この場所をアトリエにしてから10数年になるといふ。1980年代、ニュー・ペインティングの旋風に呼応するようにして登場した関西ニューウェーブの作家たちのなかでも、閃光に顕れる陰画のように、速く洒脱なタッチで描かれたダークな花や蝶のフィギュアが鮮烈な若い画家の絵画は、注目を浴びた。

画家には、大阪、関西の作家というイメージがあるが、出身は三重県の桑名市。四日市の高校から大阪芸術大学へ進んだ。「大阪へ行ったのは、美術部の先輩が多く進学していたからです。"体育会系"の部で、朝7時からリヤンをして昼休みも描

perils of the soul
1991
キャンバスに油彩
181.8×227.3cm
写真提供=ナガイフ
ァインアーツ
撮影=桜井ただひさ



1991 「子どものころ、山のなかで独りでの時間がありました。
そのときの花や風の気配が忘れられないのかもれません」

いていました」。

「当時は、専攻別ではなく美術学
科共通の入試だったので、いろいろな
人が集まりました。2年で専攻、3
年でゼミに分かれるのですが、泉茂
先生のゼミに入りました」。泉茂は、
戦後、瑛九らと結成した前衛グルー
プ《デモクラート美術家協会》の創
立メンバーとして知られる。

「自由にやらせてもらえました。
『描けば描くほど悪くなる』(完成
した結果より)プロセスのほうがお
もしろい」とよく言われたのを覚え
ています。その見きわめが大切に
と。」

《Ten dialogists》(1987)は、綿布
に油彩で描いた初期作の一点。
「最初のころは、絵画の一般的なモ
チーフを意識して、裸婦を描いてい
たのですが、そのうちにストロークや
筆致で画面をつくるのが主にな
るにつれて、そのなかから花のよう
な形態が出てきました」。

1986年、大学3年のころから
本格的に作家活動をはじめた。中



feasts 1999 キャンバスに油彩
162×162cm

原浩大、石原友明、松井智恵など、
バブル期とともに、関西ニューウェー
ヴが盛り上がりだしていた『美術手帖』
やアキラケタ・ギャラリー、国立国
際美術館などで紹介されはじめた
バゼリッツやサロメなどの新表現主
義や、トランス・アヴァンギャルドの
作品には影響を受けました」。

「有機的なモチーフは、あのころの
関西ニューウェーヴに共通した傾向
でしたが、その派手でテキイ作品に
は批判的でした。身体サイズスの画
面には、こだわりがあります」。

《perils of the soul》(1991)は
東京でも発表の機会が増えはじめ
たころのシリーズの一作。近年まで
の全作品に付けられた英文のフレ



イズのタイトルは、すべて聖書からの引用による。よく現れる花や蝶のような形態も、タイトルも、それ自体には、具体的な思い入れも記号的な意味も持たせようとしてい

るわけではないという。「絵画や作品におけるイメージの現れかたは、意識していますが、一点数時間の集中のなかで核心のイメージがとらえられるかどうかの問題

なのです」。

「子どものころ、家が養蜂家だったので、よく山に連れられて行きまして。ミツバチと一緒に蜜を求めて移動するのですが、伊勢のあたりもそうした場所のひとつです。親が蜂の世話をしている間、山のなかで独りである時間がありました。そのときの花や風の気配が忘れられないのかもしれません」。

《Feasts》(1999)の前後の連作では、長年画面を上下に滴り走っていた刷毛のストロークが消えて、余白が広がった。「背景に見えるストロークを消して、核となる痕跡こんせきだけを残したくなりました」。

この作品を描いた年に東京の原美術館で、旧作を含めて展示する機会があつて、それが転機になつた。《June 27, 2004》(2004)は、2000年以後、それまで描いてきたイメージや形態をはなれて、余白を多く持つようになった近作の一点。盛り上がった絵具の部分には、量塊といえる厚みがある。床に置いたキヤ

2004

「描く行為の痕跡こんせきだけを残せないかと……。タイトルも描いた日付になりました」



たち・かつお 1964年三重県生まれ。87年大阪芸術大学芸術学部美術学科卒業。94年VOCA展奨励賞受賞。おもな個展に85-2004年(86,94を除く)ギャラリー白(大阪)、91年永井祥子ギャラリー(東京)、93年ギャラリー M(東京)、97-2003年Oギャラリー(東京)、98年ハロドキュメンツ5 原美術館(東京)、2001年三重県立美術館、01,03年ガレリア・フィナルテ(名古屋)など。おもなグループ展は、86年「絵画以後の絵画」(ギャラリー白、大阪)、88年「臨界芸術'88の位相」(村松画廊、東京)、91年「いま絵画は - OSAKA」(大阪府立現代美術センター)、92年「筆あとの誘惑」(京都市美術館)、94年「VOCA'94展」(上野の森美術館、東京)、「アートナウ'94」(兵庫県立近代美術館)、97年「VOCA'97展」(上野の森美術館、東京)、2004年「VOCA-10年の受賞作品展」(大原美術館分館、岡山)など。

大阪・豊中のアトリエは、鉄工所の3階にある。制作は、キャンバスを床に置いて、短時間で集中して行う。近作は、手で直接絵具のかたまりを付けて、ナイフを使う[*]



この数年、色彩をモノクロームに限定するようになって、よく使うのは、白と黒の絵具[*]

ンバスの上に手で直接絵具を付けてのはした後、ナイフとオイルで引きのはしたり、浸潤させていく。

「はじめからやさうとしていたことは変わってはいないのですが、アプローチの仕方が変化しているのです。イメージになりやすく、トレード・マークと受け取られることが多い形や色彩を消して、描く行為の痕跡だけを残せないかと……。タイトルも、描いた日付になりました。」

白いフィールドに昆虫の眼が触覚のように潤んだ核を残す作品のそばで、画家の話の聴いていると、空気を顫動させる虫の羽音が響鳴して、ヒトの色覚をこえた世界の拡がりに臨んでいる気がしてきた。ミツバチのささやき」という映画が、光よりも多く、影や闇の在処に通じていたことが憶い出された。

2004年11月22日 大阪・豊中市の作家アトリエにて取材

たかみ・あきひ(美術評論家)